

第8章 普賢寺跡と中近世の漆原村

普賢寺跡の調査は、工事によりここへ捨てられた土砂を重機を用いて除去することから始まり、降雪にせきたてられるように終了するという、困難な調査となった。調査の結果は、普賢寺伝承地にかかわる遺構を検出するには至らなかった。普賢寺跡については、第2章第3節で既に述べたように、伝承と伝承地からの出土とも伝えられる五輪塔が残されているだけで、文献によってその存在をうかがうことはできない。しかし、旧徳山村は古くからの文化と共に伝承を非常によく伝えてきた村であり、以前より民俗学的に注目を集めてきた村でもある（桜田1951）。1993年に山手字沢焼にある寺屋敷跡の調査において、「寺屋敷」または「観音屋敷」伝承地より平安時代後期の礎石建物跡が検出されたように（岐阜県文化財保護センター1993）、伝承の持つ意義を軽視することはできない。ここで調査の結果に加えて、従来の知見と徳山地区に伝わる伝承を合わせて検討しておきたい。

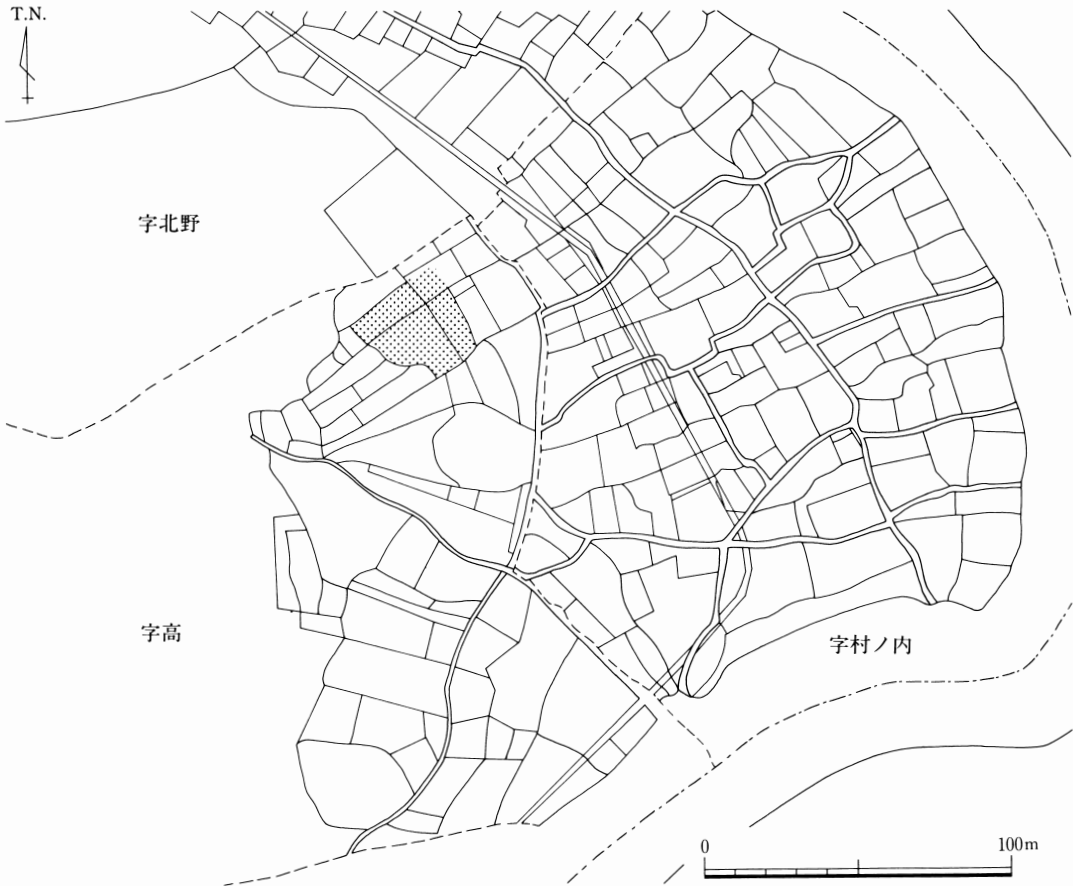
第1節 近世の漆原村

調査で出土した中世以降の遺物は、表採も合わせて53点にとどまった。内容は近現代磁器が若干出土してはいるが、中近世陶器がほとんどであった。これは、近現代において調査地が屋敷地としては用いられたことはなかったということとも符合する。出土陶器は15世紀と18～19世紀の2時期に分けられるが、15世紀の越前と瀬戸美濃系陶器が多く、16～17世紀の遺物が比較的少ないことが注意される。

普賢寺跡伝承地は地籍図で見ると、扇状地の扇頂部より放射状に分筆された扇央部のほぼ中央北よりに位置する。現在の国道417号が下位段丘の上位段丘寄りを通るが、かつては川より通る道が主道であり、「コンサツ」（高札場）等の地名もこれに沿って残っている。伝承によると、下開田集落はこの旧道沿いに家屋が広がり、人口と世帯の増加によって奥へと集落が広がっていった。調査地付近の地籍が、短冊状に奥へ伸びているのは開墾の過程を表すものと考えられている⁽¹⁾。その中にあって、普賢寺跡の伝承地が短冊状にはならず、一筆の区画を主としていることが注意される。

下開田はかつては池田郡漆原村であり、明治8（1875）年に池田郡池田村と合わせて池田郡開田村となり、明治22（1889）年に他村とともに徳山村へ合併した。文書に見る漆原村の初見は慶長14（1609）年の『濃州大野郡漆原村御縄打水帳』であり、その後正保2（1645）年の石高帳『美濃郷帳』には池田郡志津原村とある。

慶長の検地帳によると、漆原村の名請人は49人で、このうち屋敷持ちは12人と推定されてい



第43図 普賢寺跡周辺の地籍図(アミが普賢寺跡伝承地)

る。これによると、屋敷持ちに比して名請人が多く、これらの人々は屋敷持ちでなかったか、あるいは屋敷持ちに属していたと考えられている（大牧富士夫1985）。この検地高のうち、一反以上の名請人は13人で、平均の名請高は7畝にとどまり、しかも水田は皆無である。漆原村宗旨人別帳によると嘉永5（1852）年においても、家数は14と屋敷持ちの増加は見られないが、屋敷を持たない名請人はここでは消えている。

正保郷帳では漆原村の石高は太閤検高23石6斗5升（畑方19石5斗9升1合、山年貢4石5升9合）、外高（畑高）29石7斗6升の計53石4斗1升となっている。元禄高寄帳でも漆原村の村高はほとんど変化がなく、この石高は宝暦12（1762）年、明和2（1765）年、明和8（1771）年、そして幕末まで全く変わらない。これは開墾が元禄頃までにほとんど極限に達していたことと、段木の流送という収税法によっているために開墾のつどの記録がとられる必要がなかったためと考えられている。慶応4（1868）年の郷帳によっても石高に変化は見られないが、明治14（1881）年の村明細帳によると、開田村（旧漆原村、旧池田村）の水田は6町7反2畝22歩となり、水田開発がここで進んでいる。しかし、普賢寺跡伝承地の^{なか}高が水田として開発され

るのは、明治21年の漆原用水掘削の後と考えてまず間違いない。

かつてここが水田や、屋敷地としては用いられてはこなかったと考えられるところから、今回の調査で出土した遺物の性格は、屋敷地にかかわるものであると一概に特定することはできない。遺物から見た普賢寺跡出土遺物の中近世第Ⅰ期（15世紀）は、記録の上からは漆原村の実態は明らかではない。しかし、第Ⅱ期（18～19世紀）にはこれまで見てきたように若干の記録が登場し、村の姿は多少なりとも明らかになっている。中近世第Ⅱ期の遺物はこの時期の村の営みの中で、ここへもたらされたものと考えられ、商品経済の浸透が若干なりとも村へ及んでいたことをうかがわせる。

さて、普賢寺跡に近接し関連も深いと考えられる下開田村平遺跡は、大字開田字村ノ内にあって、下開田集落の中心地であったとともに旧漆原村の中心部分でもあった。この調査において、15世紀代の窯製品が見られる他は、18～19世紀の陶器類が出土している。16世紀後半の大窯製品も見られるが量的には少ない。ここで注意されるのは、普賢寺跡と同様に第Ⅰ期の遺物の次は第Ⅱ期に中心は移り、17世紀の遺物がどちらもほとんど見られないことである。17世紀は慶長の検地帳並びに正保郷帳によって、漆原村の存在が明らかである。しかし、この時期に陶器類が大量に漆原村へもたらされて使用されることは、少なくとも漆原村においては非常に少なかったのではないかと考えられる。徳山地区は木地師が活躍した地域でもあり、これらの木地師集団の生産による木地挽き製品が用いられた可能性が十分に考えられる。下開田村平遺跡、普賢寺跡の調査において木製品は検出されていないが、木製品が検出されにくい条件であることから、この推論の当否は将来に委ねねばならない。陶器類の出土が見られないことから、ただちに集落が営まれていなかったと断定することはできない。

第2節 15世紀の徳山地区の様相

さて以上のように第Ⅱ期の遺物が漆原村の姿をある程度反映していると考えるならば、第Ⅰ期の遺物はどのような性格のものであろうか。15世紀について漆原村の資料は乏しいが、徳山地区全体に目を向けると、この時期には様々な資料が知られている。

まず、応永11（1404）年の徳山二郎右衛門尉貞信が没したことを記した『徳山家伝系図』には、「宗応寺有濃州徳山」とある。ついで徳山出羽守常長の名が見られる永享3（1431）年の山銭渡状によると、「はしはら」「やまて」「いそたに」「戸入」「つか」などの地名が見られ、15世紀の徳山地区の一端を垣間見ることができる。また文明4（1472）年の徳山家文書には越前朝倉氏に従っていたことを物語る記録が見られる。史料以外では、門入の八幡神社鰐口には文明8（1476）年の年号と共に「門丹生」とあり、上開田と戸入の間にかつてあり、廃村直前に行方不明となった地藏尊には文明4年の記年と共に「増徳寺」と刻字されており、徳山氏支

配の下で宗応寺、増徳寺という寺院がすでに存在していたことがわかる。

さて、15世紀前半は徳山地区においては真言宗・天台宗の密教が盛んであったといわれ、中でも真言密教が隆盛を極めたと、徳山の各地区で伝承されている。廃村時には曹洞宗の増徳寺ただ1か寺だけであり、その他は浄土真宗誠照寺派、西本願寺派の道場が各集落に存在していた（岡野1985）。増徳寺は徳山五兵衛則秀の支配中の16世紀末～17世紀初頭に曹洞宗へと改宗したが、それ以前は天台宗、あるいは真言宗であったといわれている。密教系の影響の下で安置されたと考えられる宝篋印塔は門入（徳山村の歴史を語る会1984）、戸入、本郷、下開田において見られ、いずれも西谷沿いに分布している。宗応寺についてはその位置や宗派は明らかではないが、門入に真言宗であったという「相応寺」（揖斐郡教育会1924）の伝承地が伝えられており、戸入にも真言宗の寺院があったと伝承されている（増山・根尾ほか1982）。下開田の普賢寺と合わせて、これら密教系寺院伝承地の分布と宝篋印塔の分布が照合する。

一方、浄土真宗誠照寺派は旧徳山村の約60パーセントを門徒とする宗派で、根尾村専念寺と福井県鯖江市西福寺を手継寺とする。曹洞宗増徳寺が18パーセント、根尾村にある真宗西本願寺派の西光寺が16パーセントであるから、誠照寺派が占める割合は非常に高い。誠照寺派は福井県鯖江市誠照寺を本山とし、鯖江派ともいわれる。この誠照寺派の布教の時期は明らかではないが、誠照寺史によると、3代上人如覚（永仁5〈1297〉年～応長元〈1311〉年）に美濃布教が始まり、7代上人秀応（応永26〈1419〉年～文明15〈1483〉年）は誠照寺全盛時代の上人で、当時真照寺といわれた誠照寺の教線を加賀・能登・越中・美濃へと押し広めた。この時期に徳山の誠照寺派勢力は、確立したものと考えられる。秀応の晩年の文明3（1471）年には連如が吉崎に居を構え、誠照寺派など真宗他派を激しく攻撃した。これによって、誠照寺派の勢力は衰退を余儀なくされるが、徳山へその影響はあまり及ばなかったようで、今日に至るまで誠照寺派の卓越する地域として、徳山は存在したのである。

さて、15世紀後半が真宗誠照寺派の強力な布教が徳山地区へ及んだ時期とするならば、徳山村史編集委員会1973が「真宗の強力な布教により、天台・真言等の寺院が頽廃したものと思われる」と述べるのは、十分に首肯しうところであろう。普賢寺が下開田集落の人々によって記憶にとどめられ、地名・伝承として語りつがれてきた通りの真言密教の寺院であったとするならば、この時期に衰退したことは想像に難くない。

今回の調査では伝承を裏付ける遺構は何一つ確認することはできなかったが、普賢寺跡出土遺物のうち中近世第Ⅰ期が、真宗の強力な教線進出の直前からそのまっただ中あたるとは、注意されてよいであろう。17世紀に漆原村が存続したにもかかわらず、この時期の陶器類がほとんど見られなかったことを勘案すると、香炉等を伴う中近世第Ⅰ期の遺物が、普賢寺がかつて存在したことをうかがわせる遺物である可能性を指摘し、今後の検討に委ねたい。

註

(1) 大牧富士夫氏のご教示による。